

岩手の風土記シリーズ（32） 『いわての鬼（おに）』

みなさんは「鬼（おに）」というと何を思うでしょうか？特に岩手に住んでいると、まず浮かぶのは「鬼の手形」で岩手の名前の由来となった「羅刹（らせつ）」を思い浮かべるのでは？中には「鬼婆（おにばば）」、「鬼嫁（おによめ）」、「鬼女（きじょ）」等を思う人もいると思う？女性に鬼がつく表現が多いように思うのは筆者の気のせいであろうか？また、鬼死骸村でも紹介した大武丸や、達窟谷の悪路王を思う方もいると思う。でも、岩手で最も一般的に有名なのはなんといっても北上の「鬼剣舞」



【鬼の絵（鬼の館展示）】

であろう。岩手の代表的な民俗芸能で、その鬼にちなんだ芸能祭や、鬼の実家とも思われる「北上市立鬼の館」なる市営の博物館などがある。今回はその「鬼の館」なる場所を訪ねてみた。そもそも「鬼（おに）」は何者なのか？また、いつこの世にあらわれたのであろうか？まず鬼（おに）とは「人ニモアラズ、浅マシキ者ドモ也ケリ」と定義されているようだ。またこの起源はインドの仏教成立以前のベーダ神話に、アシュラ（阿修羅）、ヤクシャ（夜叉）、ラクシャス（羅刹）などの悪神が登場する。やがてバラモン教やヒンドゥ教へさらには仏教に発展していく。この悪神達も



【鬼のイメージ】

それぞれに受け継がれて仏教の鬼となっていくのである。さらに仏教が中国に渡り、地獄の鬼のイメージづくりに一役と言われる。中国では祀られざる死者の霊を鬼（き）といい、この世にさまよって様々な災いの原因となり、角をもつ想像上の怪物として定着していったようだ。日本では古事記などの神話に、イザナギ・イザナミの話に出てくる、死んでしまったイザナミを訪ねて黄泉の国に行ったイザナギは、イザナミのおぞましい姿をみて逃げ帰った。これに対してイザナミは雷神や黄泉軍を使ってイザナギを追った。黄泉の国の境目迄逃げてきたイザナギはそこに成っていた桃の実



【北上市 鬼の館】

を三個取って投げて窮地に一生を得たという話である。このことは桃ノ木の弓や杖で鬼を追ひ払う宮廷の行事の起源を物語っていると同時に、桃太郎の鬼退治の話に通じるものが

ある。日本で鬼の存在が定着したのは、平安時代の羅生門の鬼であり、大江山の鬼（酒呑童子）の物語で一般的になったとされる。そのころの鬼は本当に禍々しく恐ろしいものだったのだろう。しかし、現代のわれわれは、鬼をもっと身近に感じていると思われる。例えば日常的に鬼のつく慣用句が使われている。例えば「仕事の鬼」、「鬼に金棒」、「鬼の居ぬ間の洗濯」、「鬼の目に涙」、「鬼が笑う」、「鬼の首を取る」等があり、良い意味でも、悪い意味でもよく用いられる言葉である。これだけ「鬼（オニ）」が我々の日常に入り込んでいる事は、大いなる不思議である。さて、岩手の鬼（オニ）で代表的なものとは何かと言えば、岩手の県名の由来とされる「羅刹（らせつ）」であろう、また一関の鬼死骸村の名前の由来となった「大武丸（おおたけまる）」、また、蝦夷の棟梁であった「阿弖流為（あてるい）」などであろう。これらの共通点は、当時の政府軍であった征夷大將軍坂上田村麻呂に反抗した勢力であった点である。当時の北東北は当時の為政者にとっては、中央の政治勢力を広げるために邪魔な存在でしかなかった。そこで鬼に仕立てて成敗した事になったようだ、すなわち云われない侵略者の犠牲者であった。もう一つ、大船渡市の越喜来（おきらい）という地名の由来だが、越喜来とは鬼が喜んで来たという意味で、鬼の隠れ場所であった。しかし田村麻呂は海から上陸し、数にものを言わせて打ち取ってしまった。これにちなんだ地名（鬼沢、首崎、脚崎、牙ヶ崎）が残っている。この鬼たちはいわゆる地方の豪族で、京の中央政権にとっての鬼だったのである。東北の「蝦夷」や「土蜘蛛族（つちぐもぞく）」等がこれに当たると考える。次に「鬼剣舞（おにけんばい）」を紹介しよう。今回訪問した北上の「鬼の館」での玄関で手を振っていた。鬼剣舞は岩手の代表的な民俗芸能の一つで、和賀・北上地方の農民達が守り伝えてきた勇壮で激しい踊りである。正式には、盆の精霊供養のために踊られる風流念仏踊りの一種「念仏剣舞」で一般的には「鬼剣舞」と呼ばれる。この鬼は仏教によって救われたため、鬼面には角がついていないのが特徴である。念仏によって人々を救うこと、反問（へんばい；陰陽道の呪術で足踏みの事）によって大地の悪霊を退散させることを目指している。



【鬼の館に展示の鬼剣舞】



【鬼剣舞の雄姿】

この鬼剣舞は北上市で催される北上みちのく芸の祭りで、その雄姿を見ることが出来る。今年も8月4日～6日までの3日間北上駅前大通りを中心に開催された。この鬼剣舞の面には威嚇的であり、鬼面と呼ばれている。この面は四色で、八人で踊るときには一人が白面、他は青面・赤面・黒面をつける。この四色は陰陽五行説の四季や方位を表すとともに、仏經の五大明王を象徴して、白面（秋・西・大威徳夜叉明王）、青面（春・東・降三世夜叉明王）、赤面（夏・南・軍荼利夜叉明王）、黒面（冬・北・金剛夜叉明王）となっている。ところで鬼剣舞（おにけんぱい）の「バイ」は「マイ舞）」がなまったものではなく、「ヘンバイ（反閤）」からきている。反閤は、陰陽師や修験者の用いる呪法で、悪魔を踏み鎮め、邪気を払うために行うとされている。鬼の反閤と悪魔祓い、剣舞の最も重要な要素である。すなわち反閤の呪術的性格と念仏によって衆生を救う浄土信仰的性格とは結合したものが剣舞であると言えよう。その浄土信仰的性格のより濃く出ているのが大念仏剣舞であり、反閤の呪術的性格がより強く出ているのが念仏剣舞、特に鬼剣舞であるという説もある。最後に、三陸沿岸地方に伝わる伝統的な「鬼」を紹介しよう。小正月の夜に出没する「ネモミ」や「ナゴミ」や「スネカ」である。これらは、小正月の夜、仮装した姿で家々を廻り、祝福の言葉を述べる行事である。これらは福を呼ぶ鬼である。久慈市から大船渡市までの沿岸地方で代々受け継がれているが、現在は



【吉浜のスネカ】

岩泉町、田老町、大槌町、大船渡市吉浜でのみ行われている。この中で吉浜のスネカはユネスコ無形文化遺産に指定されたことでもよく知られている。以上いろいろと述べてきたが、中国の鬼（き）、仏教の鬼（おに）、夜叉、モノノケ等は、人を害し災いをもたらす恐ろしく禍々しい怪物であった。しかし、日本の特に岩手の民話や伝承、民間信仰・年中行事などに登場する鬼は、親しみやすく、愛すべき存在であった。寂しいお爺さんを慰める「節分の鬼」、悪霊を退散させてくれる「鬼剣舞の鬼」、小正月に福をもたらしてくれるナモミやスネカ等の「春来る鬼」があった。さらには大武丸や悪路王などのように、中央の為政者によって蝦夷と呼ばれ、ついには鬼にされた者たちもいた。「鬼」を禍々しい怪物のイメージだけではとらえてはいけないことを思い知らされた。特に蝦夷として当時の中央政府からの命を受けた征服者達（坂上田村麻呂等）に迫害され、鬼にされた北東北の豪族たちの復権を願うものである。

参考資料

門屋光昭著 岩手出版 東北の鬼 岩手の鬼

北上市立 鬼の館 パンフレット

第 62 回北上芸の祭りホームページ <https://geinoumatsuri.com>

大船渡市 HP <https://www.city.ofunato.iwate.jp>